

12. 準高冷地域における「ピオーネ」の着色向上のための着果量

[要約]

冷涼な準高冷地域における「ピオーネ」簡易被覆栽培では、着果量を1.5t/10a程度に制限することで、成熟開始が早まり、収穫期の果皮色を向上させることができる。

[担当] 岡山県農林水産総合センター農業研究所 高冷地研究室

[連絡先] 電話0867-66-2043

[分類] 情報

[背景・ねらい]

「ピオーネ」の果皮色は成熟期の気温が低い地域でよいとされるが、冷涼な準高冷地では成熟開始が遅れ、夏季冷涼にもかかわらず着色不良が問題となることがある。そこで、着果量が成熟の開始と果皮色へ及ぼす影響を検討し、地域に適した着果量を明らかにする。

[成果の内容・特徴]

1. 着果量2.5、3t/10a以上に比べ、着果量が1.5t/10aまででは、成熟開始の目安となる果粒軟化日は2～4日、着色開始日は3～5日早い（図1、図2）。
2. 着果量差による初期着色の差が成熟期の果皮色に影響し（図2）、着果量が1.5t/10aまででは、成熟初期から果皮色は高く推移する。ただし、10月以降は着果量によらず果皮色はほとんど変化しない（データ省略）。
3. 年次間差があるが、着果量と成熟果実の果皮色には負の相関があり、着果量がおおむね1.5t/10a以下の樹は果皮色8以上である（図3）。
4. 果皮色が高い果房は、500～650g程度の果房の割合が高い（図4）。

以上の結果から、成熟期が冷涼な準高冷地域における「ピオーネ」栽培では、着果量が少ないほど成熟開始および初期着色が早く、成熟果実の果皮色が優れる傾向があり、着果量は1.5t/10a以下が望ましい。

[成果の活用面・留意点]

1. 無核肥大処理は満開期1回処理（ジベレリン25ppm＋フルメット10ppm）とする。
2. 開花期の花穂整形等により果房重を500～650g程度に制限することで、果皮色向上の効果が高い。
3. 果皮色には気象や着果量以外の要素（樹齢、樹勢、施肥等）も関係するため、同一年で着果量が同水準でも、果皮色にはばらつきが出ることがある。

[具体的データ]

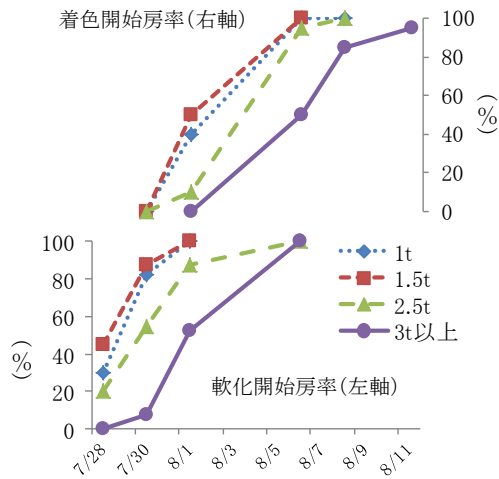


図1 着果量別にみた軟化開始・着色開始房率の推移(2014年)

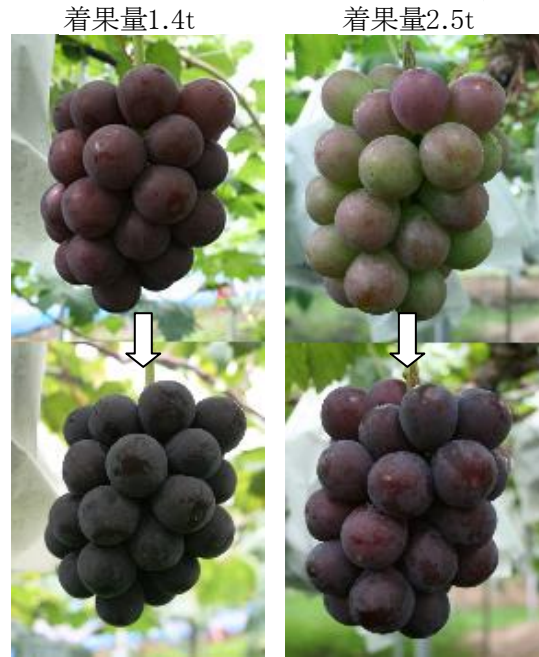


図2 「ピオーネ」果皮色の推移
(上:8月11日、下:9月30日、2014年)

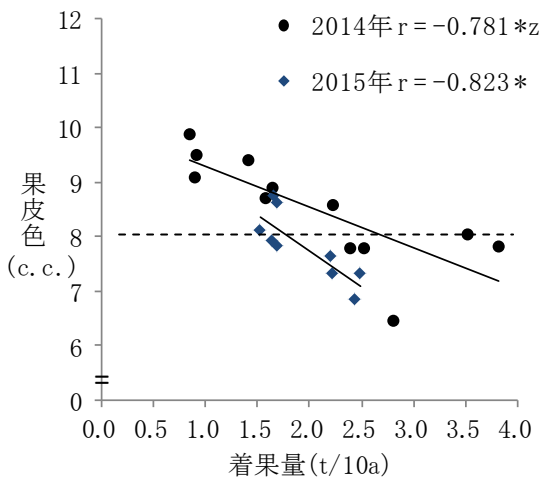


図3 準高冷地における簡易被覆栽培「ピオーネ」の樹別着果量と成熟果実の果皮色との関係(2014・2015年)

^z *は相関係数が有意 ($p < 0.01$)

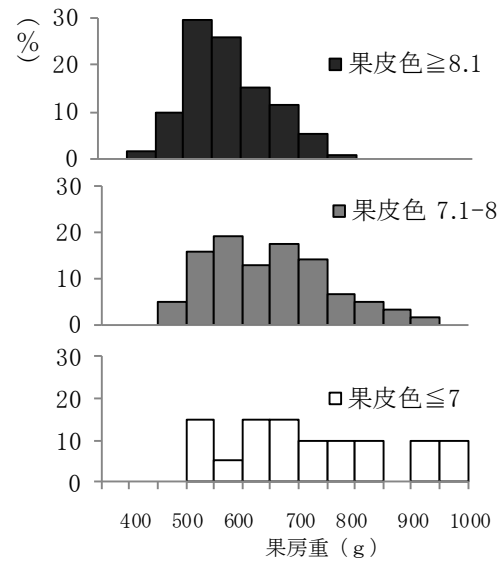


図4 果皮色別の果房重分布
(2014年・2015年)

[その他]

研究課題名：高冷地域に適した果樹・野菜・花品種の育成・選定と栽培技術の確立

予算区分：県単

研究期間：2011～2015年度

研究担当者：金澤 淳、新見 敦

関連情報等：[平成26年度試験研究主要成果、21-22](#)